

イワナガヒメの悲しみを 優しく見守ってきた米良の郷びと。

イワナガヒメの心を癒やした 「西米良村」

その醜さゆえにニニギノミコトに拒絶されてしまったイワナガヒメ。追いつ返されたその後の物語が、西米良村に語り継がれています。

ニニギノミコトに返されたイワナガヒメは、毎日毎日鏡をのぞいては自分の醜さを嘆き悲しんでいました。ある日いつものように鏡をのぞいてみると、いつにもまして恐ろしい顔が映っているではありませんか。驚き悲しんだイワナガヒメは、鏡を放り投げて家を出てしまいます。

失意のイワナガヒメは、西米良村の小川地区にたどり着き、そこで余生を過ごしたとされます。小川での生活は、自然に囲まれ米良の郷びとともに過ごす穏やかなものだったようで、イワナガヒメ自ら米や野菜を育て、それが常に豊かに実ったので、「ヨネヨシヨネヨシ(米良)」と言って喜んだのが、「米良(めら)」という地名の由来になっているともいわれています。

心に負った傷は深かったのか、晩年には米良の川に身を投げたと伝わるイワナガヒメ。その悲しみに米良の郷びとは寄り添い、大切に語り継いできました。



米良神社

イワナガヒメは、晩年に身の不自由を嘆いて今の米良神社のそばの小川川に身を投げたと伝わります。その遺骸は、川を挟んで対岸にある「神山」に葬られ、そこが米良神社の本殿です。自らの醜さを恨んでいたイワナガヒメの怒りを買わぬよう神山は女人禁制とされています。

所在地: 西米良村小川988 TEL:0983-37-1112

狭上稲荷神社

イワナガヒメを探しにやって来た父オオヤマツミノカミが、イワナガヒメがすでに亡くなったことを知り、深い悲しみの末にこの地にたどり着いて最期を迎えたと伝わります。冬には見事な雲海が見えることもあり、神秘的なたたずまいが魅力です。

所在地: 西米良村所503
TEL:0983-36-1202

※標高700メートルの高地にあり、神社までは険しい道が続きます。運転には十分ご注意ください。



西米良の神楽



撮影 五十川 満



撮影 五十川 満

若馬のごとき息立て少年は
素襖からだ抱かせて舞う
(天任)
歌 小島なお

猪粥の今年の出来を評しあう
米良の訛りを聞きつつ食えり
歌 小島なお

宮崎県無形民俗文化財に指定されている西米良神楽。村内各地区の神社で奉納されます。南北朝時代に南朝方の公家武將が村に落ち延び、京の都で舞われていた舞を舞ったのが始まりとされ、京都風雅な神楽が西米良の土着的な山岳信仰や狩猟文化と習合しながら発展し、長い年月をかけて伝承されてきました。

午後7時から日曜日午前7時にかけて、各地区の神社で33番が奉納されます。

越野尾神楽

開催場所: 児原稲荷神社 開催日: 11月4土~日

隣接する西都市銀鏡(しろみ)から継承されたと伝わり、「栗三郎」などの土地神様が出現します。

狭上神楽

開催場所: 狭上稲荷神社 開催日: 12月第1土~日

西米良神楽の原点に近いとされ、白い狐面の「眷属様」が面棒と櫛の葉を持って舞うなど独特の舞もあります。

小川神楽

開催場所: 米良神社 開催日: 12月第2土~日

「磐長姫命」の演目では、主祭神であるイワナガヒメが登場し、美しい女面を付けて華麗に舞います。

村所神楽

開催場所: 村所八幡神社 開催日: 12月第3土~日

社人といわれる者しか舞うことを許されず、神事的な「神神楽」と賑やかな「民神楽」で構成される多彩な神楽です。

※日程については、変わることがありますので、西米良村観光協会(0983-36-1111)までご確認ください。



西の米の良き村

歌人 小島 なお

川は空の姿見ならんおそ夏のひかりは水に身を投げてゆく

西の米の良き村。その名の通り、実りを迎えた稲がざらざらと重たく揺れる。九月某日、快晴。旅の初めの目的地は米良神社。そこに祀られる磐長姫イワナガヒメに会いに行くのだ。

妹はかの有名な木花開耶姫キハナサケヤヒメ。天照大神の孫・瓊瓊杵尊に見初められた美人の妹である。父・大山祇神オオヤマツミノカミの意向により、妹と二緒に妻として奉られたが、顔がよろしくないという理由で姉だけつき返されてしまう。いつの時代も世は残酷であることよ。父も父である。娘の気持ちをもっと慮ってほしい。などと、平成で生きる私の現代的感想はさておき、意外に逞しい磐長姫は失意のままに彷徨った末、辿り着いた地で稲作を伝え、楽しく暮らした。そして長い年月の後、老いた体の不自由さを歎き米良神社の裏に流れる小川おがわがわの淵に身投げしたという。

土持官司が、姫が投身したとされる場所を教えてくださいました。水深があるのか水面のそこだけが暗く濃く、冷たい色をしている。この世ならざる世界がある。あるく口を開けているようだ。結婚、仕事、老いとは。磐長姫の生涯の哀しみと不思議を思う。対岸の鎮守の森は女人禁制の神山。女性が入ると嫉妬を生むとされ、本殿を見た女性は未だかつていないとか。

芋がらの酢の物 ゆずみそ 鹿から揚げ 食べば小皿の白さあらわる

昼食は、おがわ作小屋村で四季御膳をいただく。茅葺屋根が懐かしい母屋で、食事は地域のお母さん達の手作り。土地の旬が彩り豊かに並ぶ、見ても食べても嬉しい御膳だ。配膳してくれたのは素敵な青年。素敵なだけではなく、村の人口推移や、若者の比率について丁寧な説明をしてくれ、まことに頼もしい。

米良弁の訛りぬくとしやわらかき和紙に双耳は包まれゆけり

西米良温泉ゆたゝとは語り部イベント「秋の語り」と申すカッチンカチンが催されていた。西米良に残る民話や伝承を、語り部の方々が米良弁で調子をつけて話してくれる。「と申すカッチン」と言って手を一回叩くと「おしまい」の合図。こは聴衆も声と手を合わせる。賑やかなトンチ話もソゾツとこわい話も、この締めくくりで現実にくつと引き戻される。なんだか癖になりそうだ。

笛の音は櫂、太鼓の音は舟として九月の風のなか漕ぎいだす

旅の終着点は村所八幡神社。後醍醐天皇の第九皇子・懐良親王かねながを主祭神とする神社で、六百年の歴史ある村所神楽が伝わる。演砂官司によると、十二月の神楽に向けてこれから準備が始まること。官司は舞も、楽の演奏もされる。

この日は特別に太鼓と笛を実際に演奏してもらえることに。真冬の夜神楽ならぬ、晩夏の昼神楽の趣である。戸を開け放した社殿に響く楽は、木々の枝の撓りや、風と風が纏れる音、自然の息遣いと一体となつてゆくのがわかる。このひとときの体験は見えざる「なにか」の存在を確かに私に感じさせてくれたのだ。

※このエッセイでは日本書紀に基づいて神々の名前を記載しています。



【執筆者紹介】

歌人 小島 なお

1986年、東京生まれ。2004年、角川短歌賞受賞。2007年、コスモス入会。歌集に「乱反射」(現代短歌新人賞)、「サリンジャーは死んでしまった」。2016年度には「NHK短歌」選者を務める。